

## 1. ピス島について

### ○生活面

#### 衣

ピス島の人々の服は、主にウェノ島で購入したと思われる輸入品を着ている。女性の服はカラフルで、日本にはない色彩と装飾であり、お店や洗濯物で並んでいるカラフルな様子は色鮮やかで美しい。履物はサンダルが多数を占める。帽子は男物が多い。お店に行くと、女性用の帽子は売っているが、被っている女性はほとんどいない。若い人の格好も中年の人の格好と、私が以前住んでいた加計呂麻島の人とあまり変わらない気がする。変わるところは、服の彩色くらいである。

#### 食

出された料理の印象は「奄美に住むおばあちゃんの料理みたいだな」である。料理で用いられる魚（ブダイ・オジサン・赤うるめ）や貝（三角貝・朝鮮サザエ・しゃこ貝・てらだ）は奄美大島でも食べられている。主な調理法は焼くまたは揚げるである。焼くときは、魚や貝全体に火が通り、かつ表面を焦がさないよう、弱火を用いる。鮮度がいいので刺身にして食べても美味しい。調味料の中に、しょうゆ（輸入品）があるが、現地ではココナッツを発酵させてできた酢と唐辛子を混ぜた調味料を用いる。魚や貝との相性は抜群である。主食は米（主にアメリカからの輸入米を使用）である。しかし、炭水化物源は豊富で、バナナ、パンノキ、芋などがある。バナナは奄美で食べられているものと似ていたが、ピスのバナナのほうが固い印象であった。肉類について今回は食べなかったが、家畜である犬、鳥や豚、時にはウミガメを食べるそうだ。

また、嗜好品として檳榔がある。檳榔は熟していないヤシの実に石灰、たばこ、キンマの葉を包んで、奥歯でかむ。化学反応を起こしたヤシの実の汁を味わうと、胸の周囲が熱くなる。しかし、石灰のみを口腔内につけてしまうとやけどしてしまうので注意が必要だ。日本ではあまり知られていないが、東南アジア、ミクロネシア、台湾では嗜好品として流通している。鮮度の高い檳榔はヤシの実が持つ甘さを楽しめる。

#### 住

私たちがもてなされた住居はコンクリートでできているが、島を回ると、トタン屋根で床が土の住居が多い。中にはココヤシを使って、できた住居も。ココヤシの凡庸性は高い。幹は柱となり、葉は屋根やベット、殻は燃料となる。

違いを感じたのは、奄美大島の家では台風が来ることや、敷地の範囲をしっかりと区切ることから、サンゴや石、トタンで垣根をつくっている。しかし、ピス島の家ではこれらは見られなかった。ピス島では台風が来るとは少ない。熱帯低気圧の段階であることが多いからだ。しかし、昨年、ピス島に台風が襲来した。島には高台がない。風や雨の被害はさることながら、高潮による家の浸水、倒壊、農作物の被害は甚大なものであったようだ。

## ○コミュニティ形成

ピス島では男性と女性でコミュニティの形成が全く違う。男は男で、女は女で固まることが多く、男女が共にいるということはあまり見られない。女性は炊事や洗濯等の家事を行うが、男にその様子は見られない。外部の人間に対するおもてなしはとてもいい。

これは、日本でも似ている。奄美では晴れの日には鶏を絞める。客をもてなすときは腹を満たしてもらえようもたらず。しかし違いは、日本だと、男が仕事をしてお金を稼ぐから、男性が立場は上だという風潮があるが、ピス島では、家庭を支える女性のほうが、男性より立場が上であると感じた。ピス島では、産業らしい産業がない。私は貝のネックレスや貝殻を購入したが、農業や漁業でしか仕事がないように思える。

また、ピス島ではいくつかの集落があるが、集落同士が仲良く交流しているかわからない。私たちが泊まった集落の子供たちと遊んでいると、別の集落の子供たちがそれを見ていた。しかし、その子供たちは、私たちが遠くからじっと見つめ、遊びに参加しようということにはなかった。集落間でルールや立場、関係性の違いがあることはうかがえる。しかし、それは日本も同じである。奄美大島では、運動会等の行事を、集落対抗で行うが、仲の良い集落同士と悪い集落同士の関係が露骨に表れる。ピス島の実態を詳しく調べることはできなかったが、日本の村社会と似たものを感じた。

## ○文明の恩恵と窒息感

綺麗な真水を得るということは、実はとても困難である。ピス島では、地下水にある真水を島中の人々に供給する装置はあるが、整備をする資金や人材が無いことから、無用の長物となってしまっている。日本では真水を得る整備やシステム、維持するためにメンテナンスする人がしっかりしているからこそ、簡単に真水を得られる。今回の研修では、我々は文明やシステムの上で成立し、いかに恩恵を受けているか感じた。

しかし、おなじインフラでも、電気に関しては、なくてもよいものだと思っている。日本の生活ではオール電化、パソコン、通信機器など、電気の恩恵を受けて生活をしている。日本で生活することを考えると、電気はなくてはならない。電気があることで、人は夜にも生活が延長することができる。また通信機器によって人間関係を構築する私たちにとって、電気のないことは、人間関係の切断と言える。しかし、それは日本人という立場から見たものであって、ピス島の人から見れば、オーディオ機器の充電ができないこと以外であまり不便を感じていないだろう。

私は、この研修を行う前、先ほど述べた、通信機器でつながっている人間関係の切断に不安を覚えていた。しかし、実際ピス島での暮らしには、そのような不安は生じず、むしろなんて心地よいのだろうと感じた。私はこの心地よさを文明からの操作の離脱と考える。私が今の立場、仕事、人間関係にいるのは、人間の作ったシステムから求められていると感じた。そこにある主体は私ではなく、システムや文明であるような気がする。つまり、日本の生活は私が主体ではなく、日本の文明やシステムといった、社会構造が主体なので

はないだろうか。日本の社会構造を作っているのは、豊かさを求めた日本の先人たちが作った功績である。素晴らしいものであるはずなのに、私たちは、時にその豊かさに首を絞められているのではないだろうか。

#### ○ピス島からみた日本の教育制度への考察

ピス島はインフラ、物資の側面で見ると豊かさはない。水電気ガス水道がないのだから、日本人には不便に決まっている。しかし、その不便さは日本の社会構造の上で生活するから不便なのである。ピス島には日本に失われつつある、豊かな自然、温かい人間関係、地域性がある。そして何より、時間が豊かにある。これらは、少なくとも、今の日本の教育で失われつつあり、回復を求めているものである。自然が失われた日本では、体験活動の一つとして、自然と触れ合う教育を入れている。本来、自然とわざわざ触れ合いに行くものではなかったのに。人間関係の豊かさ、地域力の低下から「チーム学校」「コミュニティスクール」の施策が行われている。それは本来、教育で行うものではなく、社会を構成して生きる人間としては当たり前のはずだったのに。「早期教育」「21世紀型知能の育成」「教員の多忙化」「子供の多忙化」が叫ばれている。未来を生き抜くには、いろんな能力が必要だそうだが、もちろんその習得には時間がかかる。そして、新たに必要な能力は育む教育は増える一方だか、不必要になった教育を削るということはないので、どんどんやることが増えていくばかりで、教育を受ける側も受けさせる側も時間がない。豊かになりながらも、失われてしまったものがある。それを教育の力で取り戻そうとするシステムが、結局は人間の時間を奪っているという悪循環に陥っているのではないだろうか。

日本の社会構造に批判しながら、ピス島の生活で感じたことを述べたが、どっちが良いとか悪いということではない。しかし、どちらかしか知らないというのは、「生きる」ということを述べるうえで、視野が狭いのではないだろうか。この視野が狭い中では、人類を語れないのではないだろうか。

## 2. ウェノ島について

### ○戦争の惨禍を胸に

日本の戦争についての教育で、ミクロネシアについての出来事は忘れ去られるどころか、知りもしないことのほうが多いであろう。日本の歴史を記しているのは日本人である。歴史を記すというのはただ事実を述べるのではなく、そこに解釈が加わる。どうやら、日本の歴史教育においては、ここの出来事は重要視されてないまたは、見て見ぬふりをしたいものなのかもしれない。

私は今回の研修で、戦争に関する様々な資料を手に入れた。社会科、特に歴史の授業は「資料で勝負」するほど、資料が大切である。資料にある歴史的事実から、子供たちに何を感じさせ、何を考えさせるか。どのような解釈を持たせるか。どのような社会的見方、考え方を持たせるか。



上の写真は、ウェノ島のある進学校、ザビエル高校にある階段の壁画である。この資料から考えられる発問例を挙げる。

「この写真を見て気づくことはありますか。」

→子供たちに写真を見て気づくことをあげ、資料の中にある情報の発見を促す。

「なぜ日本の旗があるのでしょか。」

→第二次世界大戦で日本がミクロネシアを支配していたことを理解させる。地図帳でミクロネシアの場所を確認することで、戦争の規模がより理解できる。

「壁画にいる人は何人でしょうか。」

→中央で倒れている兵士は日本軍である。右上に描かれている人々はチュークの人々であると考えられる。戦争は無関係である現地の人も巻き込んで、行われている。また飛行機、船、戦車を運転している人や、ミサイルが誰に向けて放たれているか。絵の中にいる人々がどんな人か、その人たちの関係を考えることで戦争の構図が見えてくる。

「ヘルメットに書かれている文章は、どんな意味だろうか。」

→ヘルメットには「IN MEMORY OF ALL THOSE WHO DIED DO」と描かれている。この文章から伝わる平和への思い、戦争の悲惨さ、もうこれ以上戦争をしてはいけないという使命、命の尊さ・・・子供たちから多くの思いが感じられるだろう。この思いは、全世界の人が持っている思いなのだ。鹿児島だと、遠足で知覧や吹上にある特攻隊記念館、修学旅行で、長崎や広島原爆資料館を訪れる機会がある。そこには戦争に対する日本人の思いが詰まっている。この壁画には、チューク人の戦争に対する思いが込められている、この平和への思いは同じなのである。国は違う、文化が違う、言語は違う。それでも、平和への思いは人類共通していることを子供たちには理解させたい。

### 3. グアムについて～グアム大学での講義を踏まえて～

#### ○英語とチャモロ語、国際語と方言

グアムの栄えているところは、街というよりむしろテーマパークである。産業の中心を観光が占めている。店は、現地の人が経営をしているというよりは、他国の人や企業が経営をしており、従業員として現地の人を雇用しているように思われる。しかし、都市部を離れると、農村地帯が広がっている。北部に関しては、治安が良いとは言えない状況らしい。

観光で栄えているグアムにとって英語を話せるかどうか就職に大きく関わる。相手は、外国の人たちだからだ。今回の旅で、私は自分の英語力のなさを痛感した。この研修から帰国後、英語の練習を行っている。英語を話せるかどうかで自分の世界は大きく広がる。そう感じたからだ。また私は、グアム大学の講義にて、インターネット上にある言語情報の80%が英語であるということを知った。この事実は、情報化社会を生きる私たちにとって英語ができるかどうかで、多くのチャンスを得られるかどうか英語ができるかどうかで可能性は大きく広がる。

一方でグアムでは、チャモロ語が廃れ、チャモロ文化の衰退、民族としての誇りが失われつつあるという。私の母親は奄美大島出身だが、方言を話せない。方言を使うなという教化が行われたからだ。学校では、方言を話した子には方言札というものがかけられる。方言札をかけられた子は、方言を話している別の子に、その札かけるという擦り付け合いが行われたという。また、方言を使うと、先生から野蛮人と言われ、竹刀で叩かれたようだ。鹿児島でも、「日新いろは歌」「かごんま弁」が文化面だけでなく、観光面（明治維新150周年に向けての事業）で注目され、小学校で行われる学習発表会では、方言を用いた発表も多くみられる。言葉の廃れはその民族の誇りの廃れであるのかもしれない。しかし、日本人が、言葉に誇りをもって方言を学んでいるのかはわからない。

それと同様に、チャモロ人の人たちがチャモロ語に誇りを持っているかわからない。年配の話せる方はそうであっても、若い世代の人たちはそうであるかわからない。私は自分の言語に誇りを感じたことがないので、今回の話ではまだ理解できていない。言葉に対して新しい視点を獲得した。いま日本は英語教育の早期化が議論され、その比較の中で国語の重要性、国語教育の在り方が問われている。どちらの教科も言語の教科。言語は誇りという視点から二つの教科について再度理解を深めていきたい。

#### ○教育システムの違い

日本の素晴らしいところは、どんな離島であっても教育施設が充実しているということである。特に離島やへき地ほどICTの設備が充実しており、電子黒板、実物投影機が充実している。ピスやチュークやグアムは、教育設備は充実しているとは言えない現状である。教科書は教師個人によって決められるので、教育水準の確保が難しい。ピス島では、三角形が例示できないほど、教材に恵まれていない。

しかし、日本では設備やシステムが整っていても、機能しているとは言えない現状がある。例えば ICT 教育で用いる、電子黒板はほこりをかぶって教室の隅にあることが多い。その理由として「使い方がわからない」「ソフトウェアの起動が遅いため、休み時間の間に準備ができない」「コードが多くついていることが子供たちにとって危険」という意見があげられる。グアムでは、教育の公平性を考えた教育システムが必要であるが、日本では教育システムを動かす教員養成や資質向上に努めなければいけない。

## ○女性

ワークライフバランスの問題は男性よりも、女性のほうが深刻であるだろう。今の時代、女性も仕事をするのが自己実現の一つである。少なくとも日本ではその動きは高まるが、それでも、半分の女性は専業主婦を望んでいるのが現状だ。そういうことを知識として頭の中に入れていても、私自身ぬぐいきれない。私は結婚願望がある。一人で過ごすよりは、誰かと過ごしたほうが人生楽しいと思う。それが妻や自分の子どもと過ごすのであればどれほど楽しいものだろう。しかし、鹿児島の教員になると、広範囲での転勤があり、特に離島やへき地は、教員を目指す学生であっても、行きたくないと思う人がいるくらいだ。鹿児島の教員と結婚した女性は、ある一定の職について働くということは難しいだろう。単身赴任という方法もあるが、それだと結婚をわざわざしなくてもという意見がある。

なので、私は結婚相手に、離島やへき地に行ってもいいということ。できれば専業主婦や、パートやアルバイトを転々としてもいいという人がいれば、理想ではあるが、それは世の中の女性のワークライフバランスの考えと矛盾しているし、それを結婚相手に押し付けていいのかわからない。講義をしてくださったイノウエ先生は女性のキャリアを研究されているので、今回の講義と先生の論文を読んで、女性のキャリアについての見識を深めたい。

一方、チュークやグアムでは、人間関係の中で男女の境が日本同様はっきりしていることが分かった。男は仕事に従事して、女は家庭に従事している。そのような印象を受けた。実際に料理を行うのは女性だし、私が床を掃除していると、訝しげに笑っていた。「なぜ、男のあなたが掃除をしているの?」といった感じに。私たちが、親切心や気遣いで行っていたとしても、彼女たちには役割がある。むしろその役割を奪われることは心地が良いものではない。女性でない私にとっては、女性の幸せを考えることは難しい。少し、共感はできるかもしれないが、理解をすることはできないだろう。しかし、寄り添わなければ、男女の機会均等の是正はできない。

## 4. おわりに

今回の集中講義を開講し、私たちに懇切丁寧な指導をしてくださった山本宗立準教授には心から感謝しています。先生は現地の人から親しみと信頼と尊敬を受けていました。それは今求められる、地域とともに歩みあう教師像まさにそのものでした。今回の研修は、

先生のもつ社会的資本をもって成立しています。私自身、人とのつながりを大切にする教員になりたい。その具体に向けて、学びが深まりました。また、初めての海外であり、英語もうまく話せない、聞き取れない、海外の形式に慣れていない私を支えてくれた大学院の皆様にも感謝致します。更に、食事や宿の準備、私たちを受け入れてくれたピス島の皆様や、宴やBBQをし、家族のように迎えてくれたグアムの Nereo 家の皆様にも心から感謝致します。

今回の研修で出会った人々とのつながりは私にとっては宝物です。今後の人生、キャリア、教育で、私の周りの人々に還元していきたいです。